

評伝・橋寺太郎

A critical biography: Taro Hashidera

三 上 隆 三
Mikami, Ryuzou

もくじ

I — 序

II — 通称創造の名人

III — 駄仮説

IV — 寸景・ドイツ語授業

V — ひとつの異聞

VI — 学生虎口を脱す

VII — 論文

VIII — 側面いろいろ

IX — 禅僧

本稿「評伝・橋寺太郎」は『経済理論』329号に寄稿した「三貨制度の変容のはじまり」に中国語の越多越好（ユエ・ト・ユエ・ハオ）を使用して論の展開をこころみた折、筆のすさびで旧制官立＝国立・和歌山高等商業学校（以下和高商・高商と略す）時代の思い出のひとつとして、橋寺太郎教授（以下教授とのみあれば、橋寺太郎を指す）のドイツ語授業風景にふれた。それを若干の高商同期生の閲覧に供したところ、好評のようであったので、改めて教授の公私両面にわたる全面的考察をこころみることにした。

上記拙稿を読んだ同期生の旧友から私信や資料等が送られてきた。これらをも活用してここに旧稿を改め「評伝・橋寺太郎」を書くにいたった次第である。

ただしよせられた書翰の本稿への活用は、以下における既成事実による事後承諾を強制することになるが、それを海容されることを信じて疑わない!？。

I ——序

手許において日常的に愛用しているにすぎない辞典類のひとつに角川版『漢和中辞典』がある。とある日のこと、たまたま容れものとしてのハコを意味する文字として、それには箱匣篋簞等々の十六文字もの漢字が列挙されていることにいささか驚きいった。漢和大辞典と称する本格的な辞典ならば、その列挙されている字数は必ずや倍加するのではなかろうか。

もとより抽象的には容器としてのハコには違いはないが、具体的にはそれぞれの文字が違うようにその用途には差異がある。この文字は衣服用のハコであるとか、これは矢を入れるハコであるとか、化粧道具用であるとか香木用であるとか等々の区別がある。

ところで現在のところでは、数学用語としての英語 function の訳語に関数という文字がある。これは本来的には函数から時代の流れによつての改変造語であつて、正しくは函数と表現されなくてはならないのである。函^{オン}の音はカンで訓^{クン}はハコである。その具体的内容は手紙を受取り出すハコ——中国では信書を自宅の函に入れておけば業者が相手に届けてくれたということ——なのである。

以下のことは真偽のほどを保証しかねるのであるが、中学生の時の数学の先生から次のようにこの言葉の由来を教えられたのだった。ある数値を入れるとそれに対応する数値が出てくるところから、その数値の対応した出入りを担当するものを、その中身＝メカニズムのわからないブラック・ボックスに見たて、ただし信書の出入りするという現象の相似もあって、これを数値がハコから出入りすることから函数と漢訳したということだった。

訓^{クン}よみでは同じハコなのだが篋^{オン}という文字がある。この音よみはキョウである。主として書籍類を入れる長方形のハコである。辞典にのっている熟語は案外に少なく、その一つに篋底^{キョウテイ}がある。篋底に〇〇を貯える・探る、篋底に〇〇を

おさめる・〇〇を秘す等のように活用するわけである。ではどうして篋底という言葉が突如としてここに登場することになったのであろうか。

本稿の成りたちを正直に言えば、和高商の同期の二十一期生が八十才になったのを記念しての旅行とともに同期生全員の論文・エッセイ集の作成が計画され実行されて配布されたのだった。本稿はそれに間をあわせるべく大車輪で執筆したものの、稿了時には既に二十一期生会の解散とともに卒寿会記念行事はすべて終了とされていたのだった。したがってそのままならば文字通り本稿は篋底に秘さるべき命運下にあったわけである。

世の中は不可思議なもので、そもそも何が起こるかわからないのである。この故に長生きしてよかったと思えることがママあるわけである。『経済理論』同類の雑誌にみられる〇×教授追悼号には、ひとつのパターンがある。故人と同期の人にその思い出等を投稿してもらうことこれである。もしも教授が和歌山大学経済学部教授だったら、その逝去の追悼号に上述の思い出の投稿のあるのと同様に本稿が本誌に登場してもおかしくはないはずだとの解釈・理解から、本誌への投稿がみとめられたという次第である。この判断に敬意を表したい。かくて時間との競争で執筆した旧稿に、はしがきにおいて述べたように若干の手を加えたものがこれから登場する本稿である。

Ⅱ——通称創造の名人

実に摩訶不思議という以外にはなにもないのだが、高商の同期生のひとりに伊藤幸安君がいる。彼は恐らく両親から「ユキヤス」という名をつけてもらったものと当然に思うのであるのだが、高商の同期全員はなんのこだわりもなく当然とばかりに、彼を「コウアン」と呼んではばからなかった。筆者もその一人である。筆者のゼミ生のひとりが彼の経営する会社に採用されたのだが、筆者と彼との会話では伊藤君のことをコウアンと呼んでいるのである。ただし筆者はもとより彼も伊藤君を尊敬していないのではなくて、逆に他社であれば書類調査のみでハネられる持病があるにもかかわらず、伊藤君があえて採用して

くれたことへの感謝の念を片時も忘れたことはないのである。

この伊藤ユキヤスではなくてコウアンの通称＝愛称を創造・贈呈した人物こそ、なにをかくそう教授その人だったのである。同じく教授の毒牙?にかかった犠牲者になったもうひとりの人物に伊藤尚徳君（福井商業出身で入学試験成績二番で合格という）がいる。彼は両親から当然に「ナオノリ」又は「ヒサノリ」の名をもらったろうに、教授から「ショウトク」との通称をもらったことになる。なぜなのか。ここが微妙にして大事なポイントなのである。

コウアン君からの手紙によれば「青谷君の次が（名簿上で）私だったので（教授に）当てられる（このことの実体についてはIV章で詳述）比率が多く」とある。青谷君とは当時の日本の代表的商業学校だった京一商こと京都市立第一商業学校——輩出した大学教授の数はカウントリスであるのは当然のこと、その中にあっても日本における文字通りの経営学の創出者たる増地庸次郎や財政学の井藤半弥——ともに現一橋大学・東京商科大学教授——の存在はその象徴であろう——からの推薦＝無試験入学の秀才である。彼の名は青谷貞雄である。彼には失礼で申しわけない?ことを述べるが、教授は青谷君の場合のテイユウとよぶことに魅力?をどうも感じなかったようで、名芸で両伊藤君になってコウアン・ショウトクの通称を創造して満足し、これら両君に献じてくれたのである。この意味において、両君にとっては名誉なことだといわなくてはならないだろう。というこの断定は如何なものだろうか。

Ⅲ——駄仮説

「このままでは食べてゆけぬ」と東京大学の英文学の教授職を放棄して在野の評論家になって、時の人として世間の耳目をあつめた人物に中野好夫がいる。教授とこの中野好夫とは六才年長の従兄弟、より具体的にいえば中野の父の妹^{イトコ}の長男がほかならぬ教授なのである。

教授は十一人の子供の長男すなわち太郎として明治30（1897）年2月2日に生まれた。ところで教授の父は底抜けの正直者であるとともに、それとウラハ

うの関係をもつと思われる「頑さん」とのニックネームが如実に物語っているように極つきの頑固一徹の親父だったらしい。このことから以下のような駄＝拙仮説が成立するのではなかろうか。

健康を害した教授は当然に治療のために病院に行くのだが、入院中によくベッドから床に落ちたらしい。このために付添^{ツクソエ}として弟の六郎が隣室に待機していたのだった。教授がベッドから床に落ちた音を聞くや否や「駈け寄って抱き起こすと、＜おお六郎、有難う＞と軽く笑ってただ一言^{ヒトコト}。だがそのあとはまたすぐ＜出て往け＞であったというのだ」（中野好夫「私の中の日本人——橋寺太郎——」『波』（新潮社 P.R 誌）1973 年 4 月号, P.11）。

そこで教授の父の正直者と頑固者との合成された性格からいって、十一人もの子沢山のなかにあって、教授が男の子であり長男だったので太郎と命名され、以下男の子は次郎・三郎……六郎とされたのではなかろうか。かくて十一人の兄弟姉妹の $11-6=5$ の引算^{ヒキザン}よろしく、残りの五人が姉妹ということになるのではなかろうか。このように類推したわけなのだが、このような帰結を出しても、多分本稿の読者方からの「時間が無駄で、そんなことが知りたくてこれを読んでいるのではないぞー」との叱責の声が飛んできそうである。とまれ教授の出身地は何処なのか。このことがわからずしてそもそも橋寺太郎伝の成立しようはずもない。ただしここでわかることはある。従兄弟の間柄にある有名人の中野好夫の出身地は愛媛県であるが徳島に移り徳島中学生になっている。これは多分年長の教授の行動にしたがったものと思える。

もとより教授の原籍地は兵庫県多紀郡篠山町である。原籍地と居住地の不一致は普通のことであって、理由はともかく教授の出身地は上述の中野の行動の推定根拠からも中野同様にここでは愛媛県ということにしたい。

IV——寸景・ドイツ語授業

本節は本誌『経済理論』229 号への拙稿「三貨制度の変容のはじまり」よりの引用である。

筆者（三上）は天下の和歌山高等商業学校の学生であった時、第二外国語として中国語を選んだ——このことを読んだコウアンこと伊藤君が手紙で「中国語の履習生とは知りませんでした。先見^{センケン}の明^{メイ}がありましたね」と書いてきてくれたのだが、筆者にはおおそれた先見の明などあるはずもなく、ましてや現在中国への先見——深よみ?——などいうもおろかである。第二外国語に中国語を選んだのは、ただ出身商業学校で中国語を習っていた関係で、和高商での中国語の選択もその継続にすぎなかったのである。

禍福はあざなえる縄の如しという名言があるが、これを至言であると実感したのは学徒動員という名の戦時（太平洋戦争）政府の命令によって高商同期生全員が昭和19（1944）年夏に尼ヶ崎の住友鋼管製造所に行ったことによってである。ペンをすててハンマーを握っても国にむくいるに何の差もない、といった主旨の歯のうくような歌詞をふくむ歌謡曲とともに、文字通りにペンの代りにハンマーをもつべく軍需産業の雄・住友財閥の有力部門におもむいたのである。

ところで伊藤幸安君^{コウアン}なのだが、私信で「何時も緊張の——これについては以下で詳細に述べる——ドイツ語も二年生夏——戦時ということで、一年生の学課は前年末までに終了し、翌年の一月からは二年生の学課に進んだ——で、勤労動員によって打ち切られホッとしました」は全ドイツ語選択学生の代弁であって、差当りウスッペラな意味ではあるが、とにかく福といえよう。筆者が同所で配属されたのは鋳造工場だった。そこには三つの鋳造炉が並んで存在しているのだが、対米戦という重要な時期^{マッタダナカ}の真只中^{マッタダナカ}というのに三分の二しか稼動していないというようなことでよいのかと案じつつ、その修理のために休止している鋳造炉へのレンガ運びに従事した。休止の鋳造炉の中へ入ったものの余熱でも熱く、支給された地下足袋^{ジカタブ}——一度きりの支給品である——も足の裏側のゴム底の親指の部位にヒビが入り割れてしまい、その代わりに履いた革靴も結局はつぶれてしまった。これはオール物資不足の時代なのでまさしく禍である。鋳造炉の修理が完全すると、その後は通称砂場といわれる鋳物工場^{コウモノ}で働いた。ここ

で製造したものは鋼管用の鋼材に丸い穴＝管をつくるための、御伽話に出てくる丸屋根の家の姿をした各種サイズのキャップである。ここで一年ほど鋳物作業をしていたおかげで、現在まで貨幣を専門分野として研究しているのだが、特に昭和 50（1975）年から約 30 年間、もと大蔵省（現財務省）造幣局（現独立行政法人 造幣局）で「貨幣史論」と題して、浅くではあるがまんべんなく広くわが国の貨幣について講義論述した。もとよりその中に一文銭等を鋳造した江戸時代が含まれている。一文銭等の研究から「その砂抜けが悪い」等の専門用語も苦もなくわかったのである。これも福にあたるわけである。青少年のころに親からよく「若い時の苦勞は買^コうてでもせよ」といわれたが、この格言も真理であることを体験したわけである。

大変長い横道に入ってしまった。軌道修正して本筋の和高商生時の第二外国語の話にもどる。およそ半分強の学生がドイツ語をとり、残りの三分の二が中国語生で、三分の一がフランス語生だった。エリートの学生というものはドイツ語かフランス語をとるものだと含意するさげすみの言葉で筆者のように中国語をとる者に「君はチャン語を学んでいるのか」としばしばいわれたものである。とはいえ中国が今にも日本を追越して、アジアの中心国になろうかという現在では、関忠治教授に伸び伸びと中国語を教えられた事に感謝すると同時に、何であれ若い時に真剣に取り組んで身につけたものは、後^{ノチ}になって必ず役に立つものだとわかったのである。上記した「若い時の苦勞は買^コうてでもせよ」の言葉が真理たる所以^{ユエン}である。

いま「伸び伸びと」中国語を学んだといったが、これは実はドイツ語学習における恐怖とキリキリ舞い状態^{ツイク}との対句なのである。ドイツ語を選択する学生数が多いために三人もの先生が担当したのだった。その中にあっての代表者・中心人物の教師は、京都大学は文学部哲学科出身の全国的にも知名の橋寺太郎その人である。

教授の授業法は宗教の禪、つまり「什麼生^{ソモサン}」と相手に問いかけ、それに対して「説破^{セツパ}」と答える禪問答形式によるものだった。これを教授がいつごろ編みだし

たのかは知らないのだが、とにかく極めてユニークな授業法であることはいうまでもない。禅問答同様に授業時間中は机上には一物をも置かない。教科書はもとよりあるのだが、そして授業がこれによって進行することは勿論のことである。しかしこれをドイツ語の授業時間までに完全に暗記しわがものとしていることが要求されるのである。

最初の授業で教授は、ドイツ語には私は（が）・私の・私に・私をにあたる四つの格があり、更に名詞には必ず男性・中性・女性という三つの性別があつて無性というものはない。それに対応して男性名詞につける冠詞は ^{デル} der・^{デス} des・^{デム} dem・^{デン} den、中性名詞への冠詞は……と格変化するといいいながら一応は黒板に男性・中性・女性名詞用の冠詞の格変化を書くのだが、これは直ちに消されてしまつて、その直後教授は静かに「○△君、言うてみる」と学生を指名するのである。指名された学生は間髪をいれず冠詞の格変化をスラスラと答えなければならない。少しでもいいよどむことでもあろうなら直ちに静かにしかし男性的な声にて高らかに「バツ」と宣告される。この教授の声が教室全体に響きわたるのである。というのもこの時には教室には強烈にして苛酷な授業ぶりへの恐怖と緊張、その当然の結果として発生する在深山の静寂が一杯にはりつめているからである。バツと宣告された学生は次回の授業時間開始時に教科書の該当部分をノートに十回書いて提出することを義務づけられるのである。

高商二十一期生のネットワークよろしく、伊藤コウアン君の動きで、まさかと思っていた同期仲間の生駒英雄君から送られてきたものは、彼の秘蔵の中野好夫のエッセイ「私の中の日本人——橋寺太郎」『波』1973年4月号——十数年前のものである!!——であつて、本稿記述のソースの一つである。上記のエッセイでは「宿題など怠けようものなら百回の罰則が課せられる」(P.9)との表現で示されている。

授業が進むと教科書の内容は主としてドイツ文とそれに対応する日本文とによって形成されることになる。授業では教授が「○×君、犬は象よりも小さい。言うてみる」と命じる。即答できなければその学生にはバツと宣告されて既述

同様の宿題が課せられる。コウアン君には既成事実による事後承諾で恐縮であるが、またぞろ代表として学生が如何にバツをうけ処理したかを紹介させてもらうことにする。「私は……バツをうけた常習犯——これな信じそ!!筆者——で随分シゴカれました。私たちの時代はバツ一回で該当する部分の教科書を十回次回までに書き写して提出した記憶があります。(同一時間中に) 二回だと二十回。夏休み前にバツを食らうと、それまで消化した分十回以上書き写さねばならず、私は十回書いた記憶があります。思えば大変なことでした」という^{グアイ}具合である。

このようなスパルタ的とでも形容しうる徹底した自己努力を強制する禅問答形式による授業にも、一席の涼風とでもいいうるルールがあった。鬼の（とも思える）教授のシゴキに耐えつつ答えている学生が、とにかくシドロモドロであっても答えている最中に——要するにバツの宣告をうける以前に第二外国語＝ドイツ語授業時間の終了を告げるベルが鳴りわたれば、その学生はセーフなのであって、その体験者達からは「寿命が十年延びたような感がする」と異口同音の感想が吐露されるのである。

もしも教授のドイツ語時間の行為が現在の薄っぺらな人権主義——被害者のよりも加害者の人権が尊重されかねないような——の世であれば、恐らくわが子可愛いのあまり P.T.A.の女傑が「うちの子供が人権を無視されて見るにしのびず放っておけない」と教授＝大学（和高商）を告発することに間違いないところであろう。ところが教授のドイツ語授業時点では、戦前の完全天皇制（未熟な言葉だが）の全盛期であって、和高商は国立学校であってその教授を子供が可愛そうだと訴えることなど全く問題外だったことは当然である。

とまれ教授のドイツ語授業は恐怖・冷酷の時間帯だった。期末テストもその連続だった。読者の皆さん＝旧高商生も現大学生も知っての通り、横線が全面に印刷されている答案用紙が先ず各人に配布される。ついで教授は十問の試験問題を順次スローテンポで一回のみ日本語で述べる。その問題と問題の間に適当と思われる——教授がである——空白の時間がはさまれる。この時間帯に学

生は答を書くのである。講義のノートをとるのと全く同じ要領である。ただし違うところは教授の課す試験問題の日本語での発言をドイツ語で記述することである。

その解答のドイツ語文のことなのだが、大文字たるべきところを小文字にしたりウムラウトのチョボの片方が不完全であっても——要するに完全なドイツ語文でなければ零点であって、惜しいからとての中間点は一切ない。したがって、一問でも完全であって十点でももらえば、学生は満点を得たような喜びにひたるわけである。

語学——に限らないが——は六十点未満が赤点であって不合格になる。ドイツ語は三人の教授が担当するので、教授の試験を零点と前提すれば他の二人の先生の試験で百八十点をとらなければならないことになる。世の中は実に不思議なもので、禅問答の授業で散々にいためつけられて身についた実力がそれをものの見事に実現・達成するのである。したがって圧倒的多数の学生は無事に進学＝二・三年生になるわけである。三年生になると教授のもとでゲーテの『ファウスト』をよむこともできるようになる。この実績を耳にしたドイツ大使館——ヒットラー政権の——はドイツ語成績の主席学生に、年によっては同点ということで次席者にも記念品を贈呈することが慣例になっていたと聞いている。和高商時代のドイツ語授業の修羅場をくぐり抜けた旧友を思い出し敬意の念をあらたにしている昨今である。

V——ひとつの異聞

教授の授業法について、それを教授が編み出した独特のものであるとする考えに対する別の見解のあることを知った。それは秘蔵の資料を提供してくれた生駒英雄君のものであって、寄せられた書簡に「(橋寺さんの) 問答形式の授業は当時禅の公案をめぐる問答形式の応用かと推察していましたが、その後、これはどうやら一高イチコウ(旧制・第一高等学校)の岩元禎教授イワモトテイのドイツ語授業の踏襲と知りました」とあった。筆者にとってはこの文言はまさしく棍棒で頭をなぐ

られたくらいのショックをうけたのである。禅問答形式の授業が教授が編み出した独特のものと思っていただけに、この生駒君の結論は気にかかるものだった。かくて学友の気易さで、その結論のよってきたる根拠をたずねたわけである。彼からの返信によれば一高・東大出身者で名前は忘れたのだが、その人物による『新潮』への小説か、あるいは岩波グループの学者の随想によったかと思うのだが「なにかのはずみで脳細胞がうまくつながったら連絡します」とのことだった。

おそらく脳細胞が繋がった!?と思われるころあいを見はからって再度彼に彼の結論の根拠について質問をこころみたところ、折返し回答してきた。それによれば上記一高の名物教授の岩元禎教授伝同様の小説・高橋英夫『偉大なる暗闇』（講談社文芸文庫）1993年、だということだった。早速同書を読むべく本屋に注文を入れたが版元絶版とのことだった。やむなく古書店を走り回^{マワ}ってようやく入手に成功・読んでみた。

「岩元禎が一高生のあいだで怖れられ、誰一人知らぬ者のない名物教授の隋一となった現実的な理由は、彼が情容赦もなく注意点（赤点）をつけ、落第させる先生だったことにあった。岩元禎を思い浮かべるとき、忘れようにも忘れられないのが落第の問題である」（高橋英夫『偉大なる暗闇』P.69）、この引用文中の岩元禎を橋寺太郎・一高生を和高商生にそれぞれ書きかえるならば、そのまま本稿にふさわしい文言になるわけである。

岩元教授による授業については「ドイツ語の教室」とのタイトルをもつ第Ⅱ章があるが、それには総じていえば上に引用した文言にみられるように岩元・橋寺両教授のあり方は大同小異であって大差なしということがいえる。ただ（『偉大なる暗闇』第Ⅱ章は本稿のような授業の具体的な記述はなく、したがって断定はできないものの、どうやら禅問答形式の授業のあり方は岩元教授にはなく教授の苦心して編み出した独特のものということが出来そうである。生駒君には気の毒ではあるが、彼がああ素晴らしい理解力をもつにもかかわらず、どうして岩元教授のドイツ語授業の踏襲にすぎないのが橋寺教授の授業だとの結

論が出てきたのかわからないのである。

VI——学生虎口を脱す

京一商よりの無試験入学の秀才の既述青谷貞雄君の二年先輩で、同じ条件でしかも同じ京一商から和高商に入った十九期生に北岡甲子郎という人物がいる。和歌山大学の元学長であり自身も京一商出身の斎藤利三郎によれば、彼は京一商からの高商への全推薦者のなかでも超一流の人物であって、和高商で彼と同期生にして伊藤コウアン君の大垣商業の先輩でもある小野朝男元学長によれば、彼は瞬発力のすごい（持続力に欠ける？）才能の持主だったという。北岡は地元京都の三高・京大コースをとっていても軽々とトップクラスで進学できる知能力者だったが、両親が学校で社会主義思想に染まる——当時は「赤になる」といって恐れたわけで、そんなことにならないようにと、入学間違いなしと思う京一中ではなくてあえて京一商——洛中の商売人の子弟でもエリートが進む京一商に入れたのだという。

それほど彼の秀才ぶりが示されたエピソード＝事件が発生したのだった。教授が夏季休暇のための宿題にと、題名は筆者の怠慢で不明なのだが、ある戯曲本の訳出を課した。勿論ドイツ語の戯曲本である。これを軽くなし遂げたのは当然である。その親友の一人は彼に頼みこんで、これを写させてもらった。その友人は彼が北岡から写しとったものを更に彼自身の友人に——したがって北岡の知らぬ間に——写させた。これが次から次へとという風に、^{ムツカ}難しくいえばケインズ経済学にいう二次・三次……への波及効果よろしく、ほぼ全員が引写してしまったのである。

提出された宿題の訳文がソックリと同じことに気付き、調べた結果、上述の事実を知った教授は烈火の如く怒ったが、そもそも原因を作ったものが北岡であり彼を罰すべしとの結論に達した。ただし如何に教授であっても一年次・二年次の評点＝成績には手を出す＝訂正の権限はないものの、三年次のドイツ語の成績を零点とした。にもかかわらず既述のように他の二人のドイツ語の先生から

の得点で軽くドイツ語の合格点を得たのみならず、戦時の特別措置によって和高商を卒業し学徒出陣によって軍隊に入った。敗戦直後のアメリカ空爆による見渡す限りの土蔵のみがポツリポツリと見える焼けのが原と化した饑餓の町・東京の郊外は吉祥寺の筆者の下宿で行なわれた柑蘆会の集りの中に復員（軍隊から自宅に帰ること）早々の北岡の顔があり、彼が一橋大学の学生だったのを知って驚いた。上述の戦時特別措置によって軍隊に入る前に行なわれた大学の入試に軽く合格・入学したとのことだった。

因みに戦時中の軍部、特に陸軍の中枢部は戦力増強という点で商業は全くなんの役にもたたないとの偏見によって、一方的に商業の名を冠する大学を名指しで改名を命じた。昭和十八年のことである。神戸商業大学→神戸経済大学と改名された。現一橋大学の当時東京商科大学では碩学で智者でもある上田辰之助教授——ラテン語で学位論文を書き上げ、これをあえて他流試合＝真剣勝負よろしく東京帝国大学経済学部^{ハクシ}に提出して博士になったとか——の提案によって、同窓生の目標・合言葉である“captain of industry”から東京産業大学に改名した。

当時のわが国には三商大と称されるものの一つに大阪商科大学があった。同大学も軍部の横車によって大阪市立大学へと改称したものとばかり思っていたのであるが、同大学出身の伊藤幸安君^{コウアン}から国立でなかったので不変だったと教えられた。

一世のアヂテーターたる羽仁五郎が現一橋大学の二十一番教室での講演中、しばしば「トウサンダイ」と口にしていたのだが、なにかわからぬがラテン語かあるいは『ミケランジェロ』（岩波新書）の著者であるのでイタリア語でも口にしていないのかと思っていたが、やがて新校名の東京産業大学の略語たる「東産大」といっていることに気付いたことだった。

筆者は敗戦直前にも等しい時期にこの東京産業大学に入ったのだが、現在ではこの産業大学と名乗る大学は全国化しているようで、その全国的愛用大学名の創案者の上田教授の偉大さを今更のように知った次第である。産業大学の全

国化を前提にして、では「日本で最初に産業大学と名乗った大学はどこでしょうか」は今大はやりのテレビ番組“クイズ・ミリオネア”への絶好の問題と信じて疑わないのだがこれ如何!?. 各地の現産業大学の学長はもとより理事長もご存知ないのではなからうかと思われる。

敗戦と同時に伝統ある旧称・東京商科大学が復活したのは当然である。筆者は羽仁五郎流に言えば東産大に入り東商大を卒業したことになる。そして教育=学校制度・体系が改変されて六三三制ともいわれたいわゆる新制大学になって、校名もその発祥地名をとって一橋大学になったという次第である。

VII——論文

蜜を集めない蜜蜂が矛盾的存在であるのと同じように、研究しない=論文を書かない大学教授=学者もまた矛盾的存在であろう。マルクス経済学を講じたことによって「赤」という理由で東京商科大学を強制的に辞職・追放された大塚金之助は、機会があればどんなものでもそれを逃すことなく、出版社のP.R誌にまでも細々ながらも書きつづけ、それらを戦前版の表紙の赤色と区別しての戦後版たる岩波新書青色版第一号たる『解放思想史の人々——国際ファシズムのもとでの追想、一九三五～四〇年——』（1949年4月）と題して一括上梓したことは周知のところであろう。

もとより世間は広いというべきか、無論文同様に有名な人物も例外的にはいることはいる。その代表者の一人は神戸大学の坂本弥三郎教授だろう。論文は生涯に一つだけと聞いているが、高垣寅次郎等の旧友にして有名学者とのつながりのおかげで学界の重鎮として活躍したと聞く珍しい存在ではあった。

既述のように全身全霊と全時間とを学生教育に投入した教授に、当然のことながら論文の思考・執筆の時間などであろうはずもない。和高商教授団の機関誌『内外研究』にでも、筆者の調べた限り皆無だった。教授は「一生ほとんど何も書いていない。死後友人・教え子たちによって、小さな追悼集が編まれているが、ほんの私的な短文三篇が遺稿として収められているだけである」（中野・前

掲書.P.7)。

ここから引出されるひとつの結論はこうである。現和歌山大学の先生方は、研究さえしておればすべて O.K. といった古きよき時代とはことなり、今や自分のゼミ生指導や研究は当然のこと、更に学生の就職その他にいろいろと世話に手がかかり、なかなか『経済理論』への論文が書きあげられないということだが、教授の学校生活と比較すれば、雲泥の差というか月とスッポンとでもいうか、どちらが学生の本当の世話をしているかは一目瞭然だろう——そのおかげで拙文の本誌『経済理論』に連載させてもらっている身分のものが、よくもそんなことを口にするよとのお叱りが聞えてきそうである——。とまれ現教授陣の一層の奮起を願いたいのである。

VIII——側面いろいろ

既に以上において部分的に引用してきた中野好夫「私の中の日本人——橋寺太郎——」（『波』1973年4月）には教授の種々の側面を教えてくれているので、これらを中心にここにその他の知りえたことを一括して紹介しておこう。

①大正末期のひところ三木清・谷川徹三等の多くの一高生が西田幾多郎等のもつ学風をしたって京都帝国大学の哲学科へわざわざ都落ち?した流れのなかの一人だった。

教授は大正7(1918)年7月に一高＝第一高等学校を卒業して友とともにミヤコオチ都落?して京都帝国大学哲学科に入り西田幾太郎に師事し大正12年3月に卒業した。そして同年4月より私立臨済宗大学＝現花園大学の講師となる。大正12年4月には更に講師として私立京都薬科専門学校＝現私立京都薬科大学にもはげむことになる。両校のいずれも大正13年2月にて講師をやめている。というのは次の②たる和高商への嘱託・講師となるからである。

②大正13年に和高商に赴任し、先ずは励行寮に舎監として勤務した。

③寮の入口にボイと脱ぎすてられている他人の下駄をキッチンと出口に向けて揃えなおしておく・便所が汚なければ黙って掃除しておく等々の無言実行・率

先行動がやがて全寮生に波及したという寮風を作った人物に野村越三がいた。中野はこの寮風について「和歌山高商寄宿舎というのは日本全国でも比類ないものではなかったのか」と激賞しているのだが、教授は彼の前任舎監としての野村越三の感化をうて人間も一変してその寮風を引きついだ。

④この結果教授に人間としてのまる味が出、「往来や校庭で学生や小使いさんに会うと彼は実に深々と相手に数倍する挨拶を返していた。それがまた自然なのだ」。

なればこそ以下に紹介する教授の人柄を反映するエピソードが後々生まれるわけである。例のコウアンこと伊藤君の信書によれば「橋寺教授は中学・商業出身者の合同組・一年丙組の組主任の担当でした。校庭の草取りのとき決められた時間内に処理しようとするれば、先ず大きな草をとってその後に小さいのをとってゆきなさい。大物をとればある程度処理したことになる。即ち大物から片付けよといわれた記憶が残っています。これを経営面でも活用させていただいてます」と。事実彼の会社・新愛知電機製作所は好成績をあげているのである。高島勝君の手紙にも同じことが「校庭の草取り作業で組主任をされた丙組をストップウォッチを持って分刻みの指導された（教授の）姿なども思い出されます」となつかしんでいる。

高商十期生の松島茂樹から聞いた話にも教授の人柄のしのばれるものがあった。高商二年生のドイツ語の時間に「それはナポレオンだ」といったら、教授はニッコリと「そのナポレオンは君の話の前後から軍人・革命家としてのナポレオンということは解かる。しかし史上に有名なナポレオンは、一人だけではない。早い話がフランス大統領・皇帝として有名なナポレオン三世もいる。したがって君の場合はナポレオン・ボナパルトと他のナポレオンに誤解されないように云うべきだ」と教え諭したということだった。これほどまでに教授は全知識をあげて学生と接していたということである。

筆者も伊藤・高島両君と同じように校庭の草とりをしたことがある。筆者は丁組（これをタッケンこと辰己健一君がチョーグミとよんでいたと記憶してい

る)に属し担任は松井武敏教授だった。どうも一年生全員が順次草むしりをしたようだが、今でも記憶にのこっているものは松井教授がその時中国の古典『淮南子』(前漢の学者名を書名にした現存文章・二十一編の書。老荘の説を基礎とする周以降の儒家・法学・兵家の思想をとり入れ、治乱興亡の逸事瑣談を述べる)の話のあったことのみである。書名だけが残し、話の内容は全忘!!。われわれの知能水準を遙かにこえる内容だったので、馬の耳に念仏たらしめたのは残念である。

⑤ 教授が励行寮の舎監としての勤務は嘱託としての辞令によるものである。大正13年3月に発せられた辞令には嘱託と同時に講師という文字があった。このことは表現をかえればドイツ語の授業を始めるということである。和高商の第1期生の入学は大正12年4月であるから、教授のドイツ語授業はほぼ和高商における授業開始とともに始まったわけである。因に教授が文字通りの和高商教授に任命されたのは大正14年4月のことである。

第Ⅱ次世界戦争=太平洋戦争によって、われわれ高商21期を最後に和高商は廃校、昭和19年に工業専門学校へ転換となってしまった。この流れに対応して教授は昭和19年3月に和高商退職となる。その後は新設の県立和医大に転職されたとも聞かすが、確かなことはわからない。

⑥教授の後半生は京都の妙心寺僧堂と学校との往復で、「終生独身、おそらく彼だけは不犯だったと信じている」(同誌P.9)と中野好夫は太鼓判を押している。

⑦教授は和高商の近くの借家に、「ある京大以来の友人と住んだ」(前掲誌P.8)と表現されている人物はおそらく広島県出身の十年一日の如く、「哲学」の講義で開講=開口一番「ギリシャの空は^{アオ}碧い」とくり返して有名なKと思われるのだが、教授とKとは同じ哲学科出身で思想もほぼ同じだったことから独身を誓い合ったのだが、後にKはこれを破って妻帯者になってしまった。教授は中野好夫にフトもしも両親が結婚さえてくれないかと思っていますねともらしたことがあるという。教授は京大での卒業論文に哲学者プロチヌス論を書

いたとの事であるが、プロチヌスは結婚は不可避の悪であるという。教授は身をもってこれを可避しうるということを示したのである。強靱な意志力をもって。

⑧昭和 27 年。教授は急性骨髄性白血病=癌?で五十五才でなくなる——2007 (平成 19) 年には没後 55 年になる——のだが、その数日前のこと、主治医 (県立和医大?の) たちの患者をはばかりの小声によるドイツ語での会話——おそらくこれを耳にした教授はバツと宣告するような程度!?のものだったろうと思われる——によって再起不能と知った。長年和高商での同僚教授であった斎藤元学長から聞くとくによれば、再起不能と自覚した教授はベッド上でひたすら坐禅をくみ、食事はもとより一滴の水すらもとらず、ミイラようになってこと切れ、坐禅をくむ姿のままでベッドから床上に落ちその姿はくずれなかったという最期だったようである。

IX——禅僧

「腹いたや 苦しき中に 明けがらす」

これは幕末に勝海舟・高橋泥舟とともに三舟のひとりといわれた山岡鉄舟の辞世の句である。名句だとはこれに対していいにくいものの、人格が反映された実直な句である。彼は胃癌とわかってほぼ一年、時には坐禅をくみつつそのまま死にいたったのも彼らしい。教授もおそらく鉄舟の句と同じような心境で最期をむかえたのではなかろうか。

奈良時代末期にも、更には明治初期にはもっと徹底・大規模な大鉄槌が墮落した仏教界に下されたのは周知のところである。その結果としての、あの法隆寺さえも今日では想像もつかないほどの荒廃ぶりを示す写真が残っている。

この墮落しきった仏教界にあっても相対的に真面目だったといわれる禅宗界にも昨今では真の禅僧はいないといわれている。この事実に対していえることは、われらが教授こそ禅宗のいわゆる高僧以上の高僧・正真正銘の高僧なのではなかろうかということである。

戒律の師として何回もの失敗と失明を克服して渡来した鑑真和上が葬式仏教という言葉が象徴している仏教界の現状を聞いたら、必ずや落胆のあまり失神するのではなからうか。明治初期の批判の対象になった仏教界墮落拡大再生産版のそれが現状である。

そもそも僧侶というものは女犯を強くいましめているのである。一体全体僧侶というものは社会のために自分の身体を挺して社会の難を救うことを使命としている。なればこそ約十分間ほどの月参りの読経でも一万円の布施にあずかり、戒名を与えて数十万円を入手するのである。

ところが現状ではすべての僧も社会の進歩に合わすのだとばかりに、人権という高尚な名目で、実体は一般人に成り下って女犯どころではなくて堂々と妻をもっている。当然子供という新しい家族も生じるので、本来の使命である一身を挺して社会を救済するところではないわけである。世も末法というべきか。どうみても現状は既述した仏教界墮落のウルトラ拡大両生産版といえそうである。

筆者の家の墓のある寺は戦国時代の名将の名とともに全国的周知の、いな世界的にも有名な H 寺である。“日本国 H 寺”のみでヨーロッパからの手紙が無事に届いたとは、その一塔頭住職タッチュウから聞いた話である。その H 寺の重職である執事長 M（その父は宗派の代表的学問僧であり、極めて温厚な人物で、現執事長と性格がちがう）なる僧がいる。彼も妻帯しているのは当然であって、そこまでは世間並みでなんら恥じることはない。

井六園という名の製茶業者がその製品の販売店を K ホテルにおき、それをまかすべく一女性従業員を雇用した。僧 M はその従業員を愛人にしたのだが、同上の売店閉鎖にともなって失業するところを自分の H 寺執事長としてもつ権限によって K ホテルから H 会館の売店へその愛人を転職させたというのである。ことの真偽のほどはともかくとして、そんな噂がたつことそのことこそは僧侶失格以外のなにものでもない。破戒僧であり仏教界墮落を告げる象徴であり仏教界の名門 H 寺にとって大きな害僧である。

上記の僧 M についてのことどもを知ると、恩師たる教授のあり方は実に真の禅僧そのものといわなくてはならないだろうことは誰れも否定しえないところであろう。恩師とはわれわれにとっての生ける人生における鑑である。広い世間には例外もありうるであろうが、教授こそは正真正銘の血潮の流れる、呼吸している、そして学生のためなら汗をかくことをいとわぬ生ける鑑なのである。筆者にとって教授の存在そのものがオーラというよりは後光=御光を発しそれにつつまれてくるのである。京都は洛北の修行地でもある妙心寺に教授は安らかにねむっている。戒名=法名は孝岳無塵居士^{ムジンコジ}という。冥福をいのりたい。